

後潟(1)遺跡

—北海道新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2011年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成21年度に、北海道新幹線建設事業予定地内に所在する後湯(1)遺跡の発掘調査を実施しました。

後湯(1)遺跡は青森市の北西に所在し、周辺では中世城館の尻八館など貴重な遺跡が発見されるなど、数多くの埋蔵文化財包蔵地が残されております。

調査の結果、縄文時代中期の土坑等の遺構や、縄文時代中期から後期の土器・石器等が発見されたことから、一時的集落として利用されていたことがわかりました。本報告書は、この発掘調査成果をまとめたものです。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部東北新幹線建設局に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成23年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 新岡嗣浩

例　言

- 1 本書は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構　鉄道建設本部　東北新幹線建設局による北海道新幹線建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成21年度に発掘調査を実施した青森市後潟(1)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は2,260m²である。
- 2 後潟(1)遺跡の所在地は、青森県青森市大字四戸橋字磯部243-570外、青森県遺跡番号は201031である。
- 3 北海道新幹線建設事業に伴う発掘調査報告書は、本書が第2冊目となる。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構　鉄道建設本部　東北新幹線建設局が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成21年8月4日～同年10月23日
整理・報告書作成期間	平成22年4月1日～平成23年3月31日
- 6 本書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター成田滋彦副参事・神康夫文化財保護主幹が担当した。第1章第1節「調査に至る経過」及び縄文土器・土製品に関しては成田滋彦が、それ以外は神康夫が執筆・編集を行った。また第2章第1節「後潟(1)遺跡とその周辺の地形・地質について」は、柴正敏教授（弘前大学大学院・理工学研究科）に原稿の執筆を依頼した。
- 7 整理・報告書作成にあたり、土器類写真撮影はシルバーフォト、石器類写真撮影はスタジオ・エイトに委託し、石質鑑定は島口 天氏（青森県立郷土館）に依頼した。
- 8 本書は、発掘調査成果の正式報告として刊行するものである。発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 9 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「蓬田」を複写して使用した。
- 10 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 11 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用し、細分される場合は小文字アルファベットを付した。土層の色調表記等には、「新版標準土色帖2005年版」（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。
- 12 挿図中の方位はすべて世界測地系の座標北を示し、各挿図中にスケール等を示した。遺構実測図の縮尺は、堅穴住居跡・土坑・焼土遺構は1/60に統一し、沢の平面図は1/200、遺物出土微細図等は1/30とした。遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。遺構実測図に使用した網掛けは、各挿図中に示した。
- 13 遺構には、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりである。

S I - 堅穴住居跡	S K - 土坑	S N - 焼土遺構	S X - 不明遺構（沢）
-------------	----------	------------	---------------
- 14 出土地点を記録した遺物は、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。土器の略号は「P」、石器の略号は「S」とした。
- 15 遺物実測図の縮尺は、縄文土器・土製品1/3、剥片石器2/3、礫石器1/2に統一し、各挿図中にスケールを示した。遺物実測図に使用した網掛けの指示は各挿図中に示した。石器観察表における数値はすべて現存値である。
- 16 遺物写真には遺物実測図と共に図番号を付した。縮尺は、土器類1/3、剥片石器1/2、礫石器3/8である。

目 次

序	
例言	
目次	
図版・表・写真目次	
第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法等	
1 発掘作業の方法	1
2 整理・報告書作成作業の方法	2
第3節 調査経過等	
1 発掘作業の経過	3
2 整理・報告書作成作業の経過	5
第2章 遺跡周辺の地形と基本層序	
第1節 後渕(1)遺跡とその周辺の地形・地質について	11
弘前大学大学院・理工学研究科 榎 正敏	
第2節 基本層序	12
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	
1 堅穴住居跡	15
2 土坑	15
3 燃土遺構	16
4 沢跡	16
第2節 遺構外の出土遺物	
1 土器	20
2 土製品	20
3 石器	20
第3節 遺物観察表	
1 土器観察表	27
2 土製品観察表	27
3 石器観察表	28
まとめ	28
写真図版	29
報告書抄録	

図版目次

図 1	後湯(1)遺跡 位置図	7
図 2	後湯(1)遺跡 周辺地形図	8
図 3	後湯(1)遺跡 調査区域図	9
図 4	グリッド・トレーニチ及び遺構配置図	10
図 5	後湯(1)遺跡周辺の地形分類	11
図 6	基本層序	13
図 7	竪穴住居跡・土坑・焼土遺構	18
図 8	沢跡	19
図 9	遺構内外出土土器(1)	21
図 10	遺構内外出土土器(2)	22
図 11	遺構外出土石器(1)	23
図 12	遺構外出土石器(2)	24
図 13	遺構外出土石器(3)	25
図 14	遺構外出土石器(4)	26

表 目 次

表 1	後湯(1)遺跡と周辺の遺跡一覧表	6
表 2	幅杭等座標一覧表	9
表 3	主要グリッド座標一覧表	10
表 4	土器観察表	27
表 5	土製品観察表	27
表 6	石器観察表	28

写真図版目次

写真図版(扉)	29	
写真 1	遺跡遠景・全景	30
写真 2	基本層序	31
写真 3	竪穴住居跡・第3号焼土遺構	32
写真 4	土坑	33
写真 5	第1・2号焼土遺構・北区	34
写真 6	沢跡(1)	35
写真 7	沢跡(2)	36
写真 8	調査風景	37
写真 9	出土遺物(1)	38
写真 10	出土遺物(2)	39
写真 11	出土遺物(3)	40

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

後湯(1)遺跡は、新青森駅から北海道を結ぶ北海道新幹線の事業予定地内に所在する。事業予定地内に所在する埋蔵文化財についての協議は、平成18年に独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構から、工事予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について文化財保護課に照会されたことに始まった。平成18年11月・平成19年8月に現地踏査を行ない、遺跡を確認した。これにより用地買収の完了等により調査が可能となった地区を文化財保護課が試掘調査を実施した。

後湯(1)遺跡については、平成20年8月（試掘調査報告は青森県遺跡詳細分布調査報告書21 青森県埋蔵文化財調査報告書第476集）に確認調査を行ない、その結果遺物・遺構が確認され、調査地区的範囲を確認した。

平成21年7月に文化財保護課、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、埋蔵文化財調査センターが現地協議し、今年度の調査は市道四戸橋1号線の北側の本線部分を調査し他の地区は平成22年度に行なうこととした。発掘調査は平成21年8月4日から行なった。

なお、土木工事等のための発掘調査に関する通知書は、平成21年6月5日付けで鉄道建設・運輸施設整備支援機構（鉄建東北建用一第59号）が提出し、平成21年7月2日付けで青森県教育委員会（青教文第470号）から埋蔵文化財の記録作成のための発掘調査の実施が指示された。

第2節 調査方法等

1 発掘作業の方法

平成20年度に青森県教育庁文化財保護課が実施した確認調査によって縄文時代の遺物が確認されていたため、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、各集落の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。平成21年度本発掘調査対象区は、新幹線本線部分13K853m～13K980mの範囲、2,260m²とした。

【測量基準点・水準点の設置・グリッド設定】測量原点及びレベル原点には工事用の既存成果を利用し、調査対象区域内に標準の国土座標値と標高値を備えた工事用幅杭や任意の基準杭を設置し、これらを実測基準点として使用した。主な基準点（幅杭等）の国土座標値は表2に示してある。また、必要に応じこれら実測基準点を与点として調査路線周辺に基準杭・ベンチマークを増設して使用した。

遺構・基本土層の精査や遺構外出土遺物の取り上げにあたっては、任意に設定した4mメッシュを組んで4m四方のグリッドとし、これを基に遺構や遺物の平面的出土位置を記録して取り上げた。メッシュには、X=104632.218、Y=-16863.002に位置する点を「A-1」とし、南北方向は南から北へ算用数字を付し、東西方向は西から東へ2桁のアルファベットを付すこととした。アルファベットは25進法とし、…、YW、YX、YY、A、B、…、X、Y、AA、AB、…、AX、AY、…、というように設定した。グリッド名は4m方眼の南西隅の杭名で呼称することとし、アルファベットと数字の組み合わせでC-24、E-48、というように命名した。なお任意で設定したこのグリッドの南北方向の軸線は、座標北より約14.4度西側へ傾いている。

〔基本土層〕 遺跡の基本土層については表土から順にローマ数字を付けて呼称し、細分が必要な場合は小文字のアルファベットを付した。

〔表土等の調査〕 調査開始直後は地区ごとに適宜トレンチ等を設定して表土及び擾乱等の状況を把握するよう努めた。出土した遺物は地区単位もしくはトレンチ単位で層位毎に取り上げた。また、このことによって表土から遺構確認面までは激しい擾乱を随所で受けていることが分かり、その時点から表土除去には重機を使用して、掘削作業の省力化を図った。

〔遺構の調査〕 検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に(株)CUBIC社製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易造り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を必要に応じて作成した。遺構内の出土遺物は遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土一括で取り上げたが、一部の出土遺物については、トータルステーションや簡易造り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成したものもある。

〔遺物包含層の調査〕 上層から層位毎に人力で掘削した。遺物が密集して出土した区域では、トータルステーションや簡易造り方測量により、縮尺1/20・1/10のドットマップ図や形状実測図を作成したが、遺物が散発的に出土した区域では、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。ただし調査区南西部ではグリッドを設定する前に遺物を取り上げたものがあり、その場合は任意に設定したトレンチ名を使用して取り上げている。

〔写真撮影〕 原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1,220万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。

2 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、堅穴住居跡1軒を中心に、土坑1基、焼土遺構3基、沢跡3条が検出され、縄文時代の土器・石器類6箱が出土した。縄文時代の集落の時期・構造等を解明するため、堅穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の変遷等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕 遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易造り方測量で作成した堆積土層断面図や遺物出土状況実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕 35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕 遺構出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に接合し、復元作業を

早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器・金属器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

〔報告書掲載遺物の選別〕遺物全体の分類を適切に行つた上で、遺構に伴つて使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、種類ごとに遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、ロットリングペンによる手作業と（株）CUBIC社製「トレースくん」（遺物実測支援システム）によるデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、紙図版による手作業とパソコンによるデジタルデータ加工作業を併用した。遺構内出土遺物は、必要に応じて遺構の平面図にそのドットマップ図・形状実測図等を掲載した。

〔遺構の検討・分類・整理〕遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕遺構・遺物の検討結果を踏まえて、集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査経過等

1 発掘作業の経過

後湯(1)遺跡ではこれまで縄文時代の遺物・遺構が確認されていたことから、調査の主眼は縄文時代の遺物包含層・遺構の検出・精査とした。調査に入ってみると表土から縄文時代の遺構確認面までかなりの面積をゴミ埋設など大規模な搅乱がなされていることがわかつたため、重機を使用して掘削の省力化を図ることとした。また深さのある搅乱土も多く遺物の出土も散発的であることから、搅乱土のすべてを掘りあげる必要性がなかったため、遺構の可能性のある部分のみトレーニチを設定して下部を確認するなど必要な部分のみ掘りあげることとした。発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	新岡 喬浩
次長	工藤 大（平成22年3月退職）
総務GM	木村 繁博
調査第一GM	成田 澄彦
文化財保護主幹	神 康夫（発掘調査担当者）

文化財保護主査 佐々木雅裕（発掘調査担当者）
調査補助員 工藤 敏大 佐々木香澄（平成23年1月退職）
梅田 裕哉（平成22年8月退職）
西田 愛 三宅 奈央子 佐々木 隆英

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員 村越 肇 国立大学法人弘前大学名譽教授（考古学）
調査員 葛西 勲 前青森短期大学教授（考古学）
柴 正敏 国立大学法人弘前大学理工学部教授（地質学）
椿坂 恵代 札幌国際大学博物館（植物学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成21年度〕

- 7月上旬 独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 東北新幹線建設局（調査委託者）、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、後湯(1)遺跡及び四戸橋富田遺跡の発掘調査の進め方等について協議・確認した。
- 7月下旬～8月初頭 後湯(1)遺跡に調査事務所・器材庫・発掘作業員休憩所や仮設トイレを設置し、駐車場の整備など事前の準備作業を行った。
- 8月4日 発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入し、職員1名、調査補助員2名、発掘作業員48名の体制で発掘調査を開始した。環境整備後、遺跡の状況を把握するために数箇所に分かれて粗掘りを開始した。
- 8月中旬～下旬 粗掘りを進めたところ土器等遺物の出土は少ないが、調査区内は瓦礫が出土するなど激しい擾乱を受けていることがわかった。また湧水も確認されたことから、重機を使用して表土及び擾乱土を除去することとした。調査区南西部では擾乱の影響が少ないと見られ、遺物が比較的出土してきたことから、遺物包含層を層位的に把握すべく、トレーナー及び土層観察用ベルトを設定して手作業で慎重に掘り進めていった。
- 9月上旬 9月から職員と調査補助員が交代することとなり、発掘作業員は変わらないものの職員1名、調査補助員4名の調査体制に変更して調査を進めることとなった。調査区北側(北区)で擾乱土が除去された区域から順次遺構の検出・確認作業を始めた。また、検出された焼土遺構の精査にも着手した。
- 9月中旬 沢部分では土器が比較的まとまって出土することがわかつたため、沢の調査をメインに進めた。しかし降雨による湧水の影響で沢の底面を検出することが難しいことから、沢の南側地区の粗掘り・遺構確認も併行して天気・湧水量の様子を見ながら沢の精査を進めた。
- 9月下旬 沢の精査を終え、復原可能土器が出土したSK01の精査と調査区全景写真を撮るための清掃作業に力をいれる。そして次の調査地点である四戸橋富田遺跡の準備も併せて行う。
- 9月29日 遺構精査・全景写真撮影を行って平成21年度の後湯(1)遺跡の本発掘調査をあらかじめ終了し、引き続き調査体制そのままで四戸橋富田遺跡の本発掘調査へ移行していく。
- 10月14日 遺跡周辺の地形・地質について、柴正敏教授（弘前大学理工学部）から現地で指導・助言をいただいた。

- 10月23日 調査で使用した器材を洗浄・梱包して越冬プレハブに収納し、調査記録類・出土遺物等は埋蔵文化財調査センターへトラックで搬出し、平成21年度の調査を終了した。
- 10月28日 平成21年度に調査を終了した後湯(1)遺跡の新幹線本線部分について、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 東北新幹線建設局に引き渡しを行った。
- 11月4日 県教育庁文化財保護課から所轄の警察署に遺物発見届を提出した(青教文第972号)。

2 整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は平成22年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成21年11月に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成22年4月1日から平成23年3月31日までの期間で行った。後湯(1)遺跡は縄文時代の遺構・遺物が主体をなしている点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総頁数は56頁で、大半を縄文時代の遺構・遺物の記載にあてることにした。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	新岡 嗣浩
次長	畠山 界
総務GM	木村 姫博
調査第一GM	成田 滋彦(報告書作成担当者)
文化財保護主幹	神 康夫(報告書作成担当者)
調査補助員	西田 愛 秋元 雅貴(平成23年1月退職)
整理作業員等	富士川葉子

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成21年度〕

11月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行い、写真類の整理作業は終了した。

〔平成22年度〕

4月上旬 発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。図面類は、必要に応じて図面修正を行い、それをもとに個別遺構図や遺構配置図の作成を開始した。遺物は遺構・グリッド・層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。

5月下旬 計測作業の終了後、土器類の接合・復元作業を開始した。5月25日には、柴正敏教授(弘前大学理工学部)に後湯(1)遺跡の地形及び地質に関する原稿執筆を依頼した。

7月上旬 接合された土器に石膏を入れて復元し、実測作業等に耐えられるように補強した。また、遺物の検討・分類・整理作業を経て、土器類・石器類とも報告書掲載予定遺物を選定し、ナンバリング及び遺物観察表等の作成を開始した。

8月下旬 遺物観察表に接合状況や図化手順も記載し、実測作業の事前準備を行った。これを基に、土器類の実測図作成、断面図作成、拓本取りなど本格的な整理作業に入っていた。

11月中旬 遺構図は報告書の体裁に合わせた図版組み作業に着手した。遺物関係ではすでに土器類の実測作業に入っていたが、それに加えて石器類の実測図作成作業にも着手した。報告書掲載

遺物の写真撮影は、土器類はシルバーフォトに、石器類はスタジオエイトにそれぞれ委託して撮影した。調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。

- 12月上旬 粗原稿や仮図版、仮写真図版等を作成し、報告書の内容・ページ数を再確認した。実測が終わった遺物は順次トレース作業を行い、印刷用版下を作成していった。
- 12月15日 出土石器類について、島口天主任学芸員（青森県立郷土館）に石質の鑑定をしていただいた。
- 1月 原稿、遺構図版、遺物観察表、遺構及び遺物写真図版などの作成・精査を繰り返し、印刷業者に入稿できるよう仕上げ作業を詰めていった。
- 2月 印刷業者を入札・選定し、原稿・版下等の入稿、割付・編集作業を行った。必要に応じて適宜印刷業者と打ち合わせを行い、校正やデータの精査を繰り返した。
- 3月30日 3回の校正を経て報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納した。

表1 後湯(1)遺跡と周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
201027	磯部遺跡	縄文	散布地
201030	山城遺跡	縄文	散布地
青 森 市	後湯(1)遺跡	縄文(前)	散布地
	後湯(2)遺跡	縄文、平安	散布地
	後湯(4)遺跡	縄文	散布地
	後湯(5)遺跡	縄文(前)	散布地
	四戸橋(1)遺跡	縄文(後)	散布地
	四戸橋(2)遺跡	縄文(後)、平安	散布地
	四戸橋(3)遺跡	縄文(前)	散布地
	四戸橋(4)遺跡	縄文(前・後)	散布地
	後湯(6)遺跡	縄文(前)	散布地
	後湯(7)遺跡	縄文(前・後)	散布地
蓬 田 村	後湯(8)遺跡	縄文(前)、平安	散布地
	後湯(9)遺跡	縄文(前・後)	散布地
	後湯(10)遺跡	縄文(前・後)	散布地
	後湯(12)遺跡	縄文(前)	散布地
	山城溜池遺跡	縄文、平安、中世、近世、近代	散布地、生産遺跡
	四戸橋富田遺跡	縄文(後)	散布地
蓬 田 村	長料堤遺跡	縄文(中・後)	散布地
	池田(1)遺跡	縄文(中・後)	散布地
	池田(2)遺跡	縄文(後)	散布地
	鶴姫遺跡	縄文(後)	散布地
	小館(2)遺跡	縄文(後)、平安	散布地

(縄文時代の遺跡のみ抜粋。道路番号は図1と対応する。)

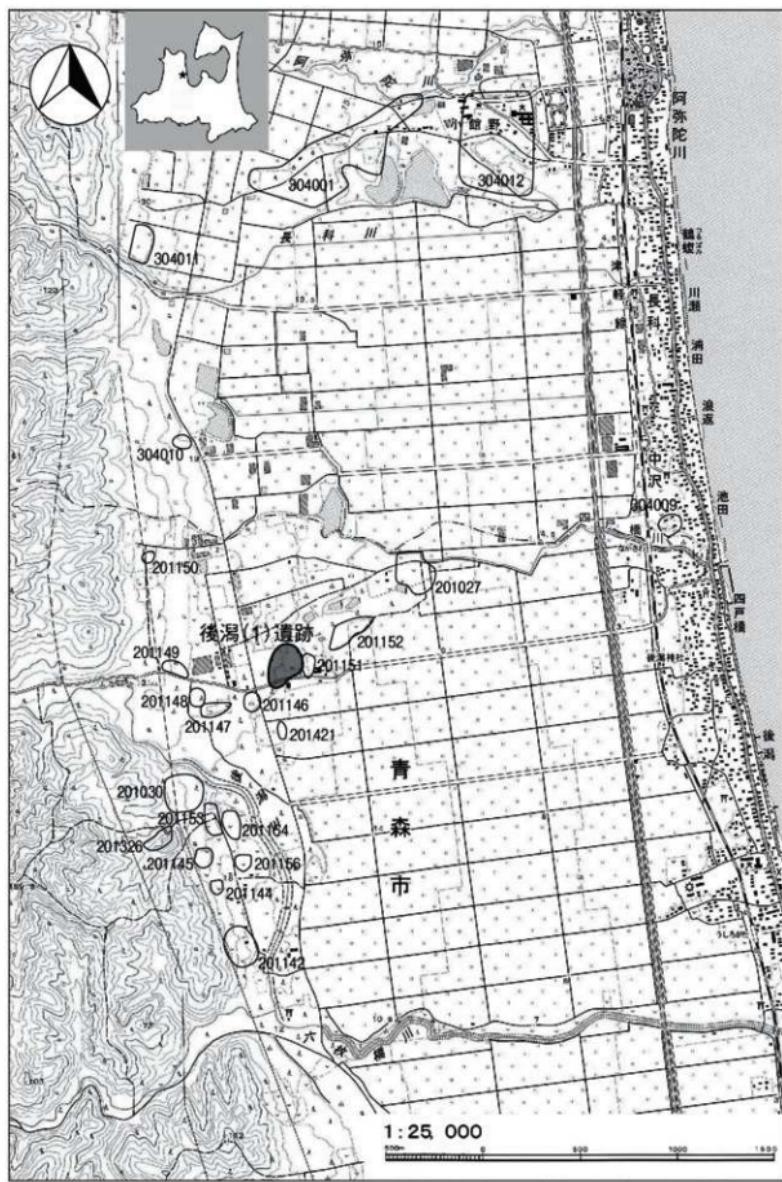


図1 後潟(1)遺跡 位置図

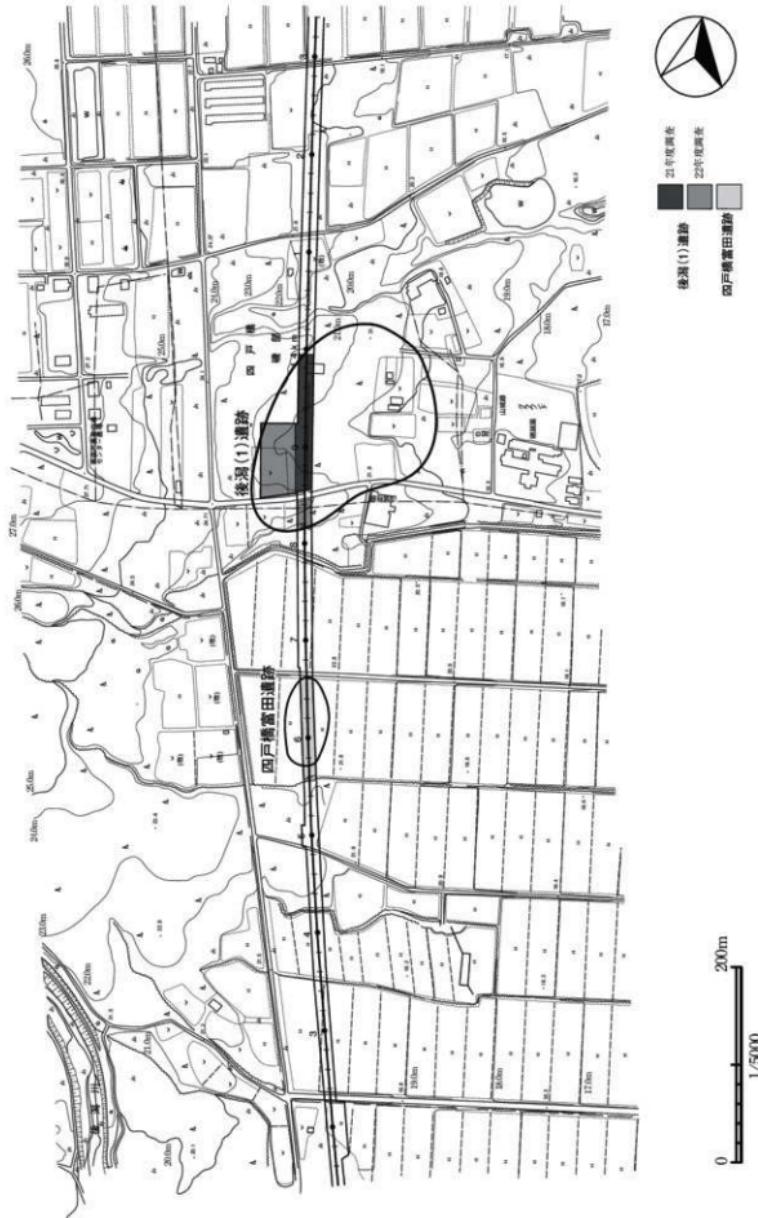


図2 後湯(1)道路 周辺地形図

表2 暫杭等座標一覧表

杭名	X座標	Y座標
杭A KR64	104722.934	-16857.805
杭B KL64	104717.189	-16852.700
杭C 13km847.52m	104706.740	-16809.085
杭D 13km820mR	104786.214	-16868.235
杭E 13km923.5mL7.58	104787.414	-16884.360
杭F 13km923.5mL7.58 - 45.65	104781.669	-16921.480
杭G 13km980mR	104845.574	-16887.820
杭H 13km980mL	104843.314	-16893.245

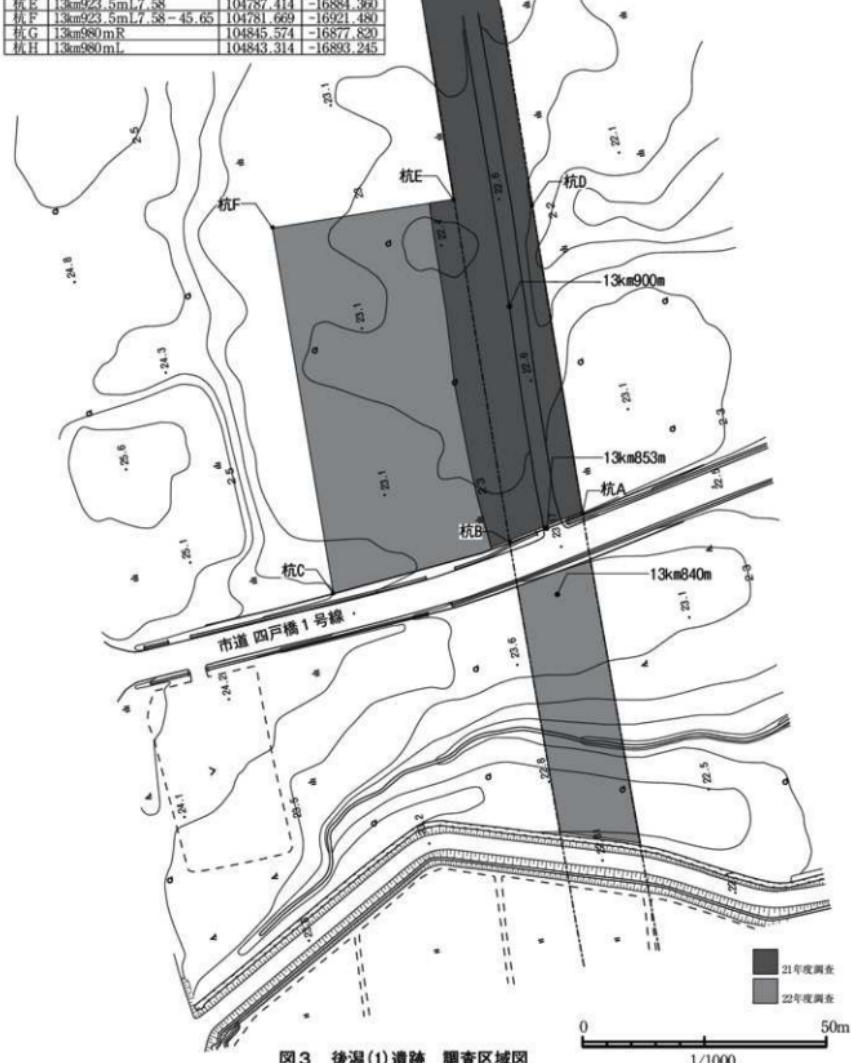


図3 後渕(1)遺跡 調査区域図

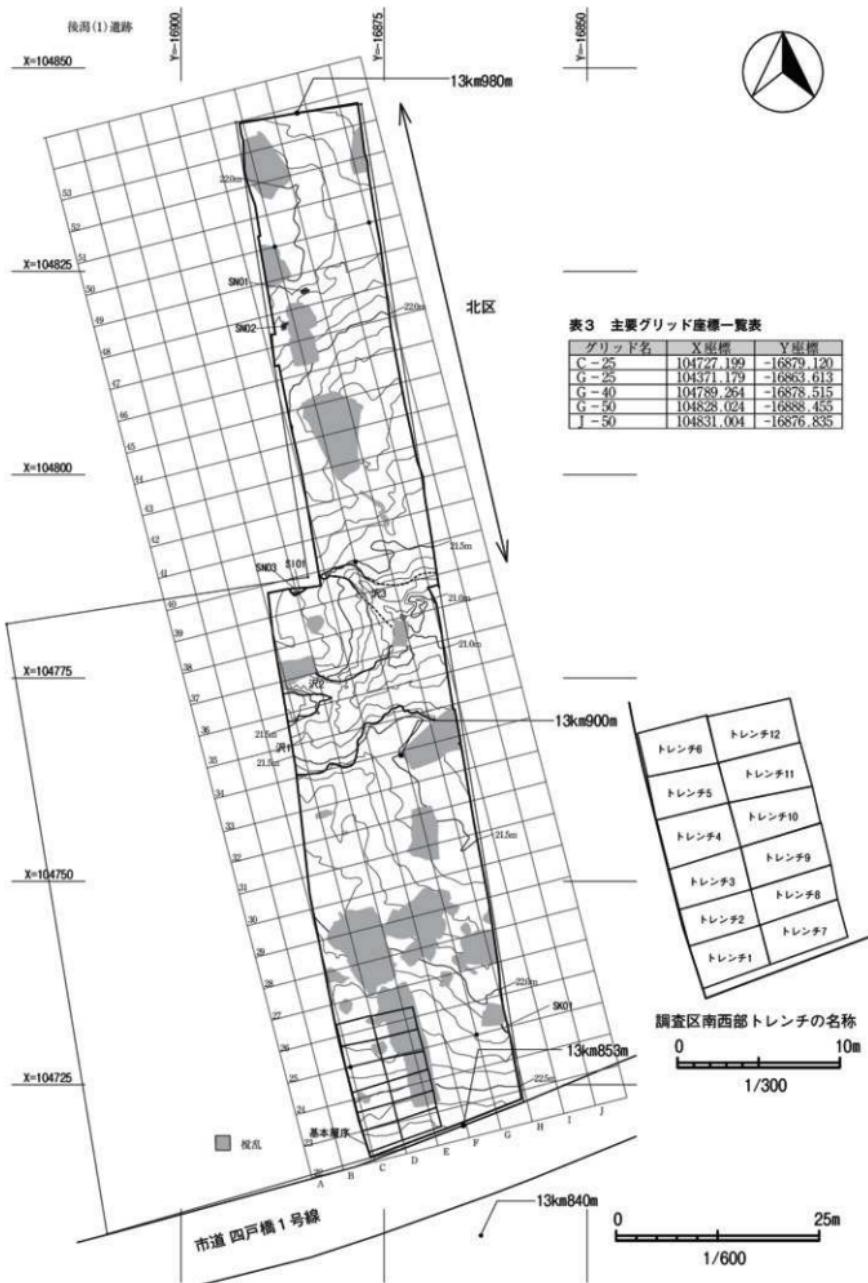


図4 グリッド・トレーニング及び造構配置図

第2章 遺跡周辺の地形と基本層序

第1節 後潟(1)遺跡とその周辺の地形・地質について

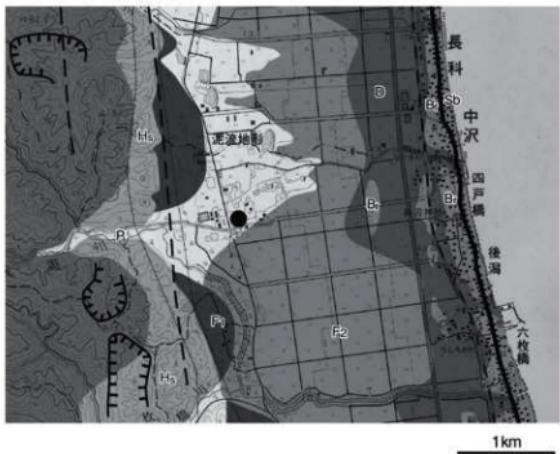
弘前大学大学院・理工学研究科

柴 正 敏

後潟(1)遺跡は、青森市北西部にあり、南北に延びる津軽山地から連続する比較的幅の狭い「丘陵地：Hs」に隣接する「低地」上に立地している。

本地域の「低地」を構成する地形をより詳しく見ると、「谷底平野：P」、「扇状地：F1及びF2」、「三角州：D」、「砂州：Br」及び「泥流地形」に分けられる（水野・堀田、1984）（図5）。

谷底平野は、遺跡周辺では、後潟川が丘陵地内を流下する部分に小規模に認められるのみである。扇状地は、津軽山地より東流する中小河川により形成され、形成する場所や構成堆植物の後背地の違いにより、「扇状地I：F1」及び「扇状地II：F2」に分けられる（水野・堀田、1984）。扇状地I(F1)は丘陵地の前面東方に分布し、台地の発達する所には分布しない。一方、扇状地II(F2)は、台地の分布しない平野地域に広く分布している。この扇状地IIの東側には、海岸線まで三角州(D)が広がっている。さらに海岸線に平行に、主に砂からなる微高地である砂州(Br)が断続的に数列存在する。



●：後潟(1)遺跡、Hs：丘陵地、P：谷底平野、F1：扇状地I、F2：扇状地II、
D：三角州、Br：砂州、Sb：浜。 水野・堀田（1984）の地形分類図を改変。

図5 後潟(1)遺跡周辺の地形分類

本遺跡の立地を考えるうえで重要な低地の地形は、「泥流地形」である。この泥流地形は、後湯川、阿弥陀川及び長科川の谷口部に認められ、径30~50mmの亜角礫及びそれらを埋める粘土より構成される。この堆積物は土石流起源と考えられ、扇状地IIの堆積物を覆っている（岩井・川村、1984）。本遺跡の基本層序VII層の砂礫層が土石流堆積物の一部に対応すると考えられる（図6）。

本遺跡周辺を構成する地質は主に、新第三紀・中新世及び鮮新世の火成岩類（流紋岩類、玄武岩類、ドレライト類など）、火碎岩類（軽石凝灰岩類など）及び堆積岩類（泥岩、砂岩など）、第四紀・更新世及び完新世の未固結堆積物（泥・砂・砾・火山灰など）よりなる。これら時代の異なる地層は、津軽半島を縦断する総延長が50kmを越える大規模な「津軽断層」を境に、その分布が規制される。津軽断層は西側隆起の逆断層であるため、断層西側にはより古い中新世の地層が広く露出し、その東側では、より新しい鮮新世～更新世の地層が分布している。中部更新統までの地層が本断層の変形作用を受けていることにより、断層の活動時期は中期更新世まで続いたと考えられている。なお、本遺跡は津軽断層の東側にあり、最短距離で約4.5kmの所に位置している。さらに、丘陵地と低地の境界にはほぼ沿って、遺跡の西方約500mの位置に、より新しい時代に活動した活断層の存在が推定されており、「青森湾西断層」（延長約31km）と呼ばれている（青森県、1999）。断層の活動時期は、周囲の地層の時代と変形の有無により、約100万年前から約60万～70万年前には活動していたが、それ以後は活動を止めたか、あるいは活動が極めて弱くなったと推定されている。

引用文献

- 青森県、1999、平成10年度地震関係基礎調査交付金 青森湾西岸断層帯に関する調査成果報告書（概要版）。青森県、47pp.
- 岩井武彦・川村眞一、1984、II、表層地質図、土地分類基本調査 油川、青森県、16-23。
- 水野 裕・堀田報誠、1984、I、地形分類図、土地分類基本調査 油川、青森県、11-15。

第2節 基本層序

後湯(1)遺跡は、青森市の中心部から北西方向へ直線距離で約16kmの地点にあり、北側800mで蓬田村との市村境がある。北西側には大倉山（標高677m）がある中山山脈が連なり、東方の陸奥湾海岸汀線までは約2.4kmを測る。調査地点の標高は概ね約23mで、調査区中央部の埋没沢付近では若干窪んでおり、標高約22mである。

基本層序の精査にあたり、調査区南西端及び沢部分においてトレンチを設定して深掘りを行い、その結果を図6に示した。調査区域の大半で表土及び第Ⅱ層は削平されて、盛土が施されている。また、調査区南西端では第VI層が、沢部分では第IV層が欠落しているものと判断した。

各土層の色調及び諸特徴は以下のとおりである。

盛土（第I層） 黒褐色土（10YR1.7/1）とロームとの混合土

10YR2/1黒色土30%、10YR3/3暗褐色土10%、 ϕ 1~40mm大ローム粒15%、10~50mm大の砾10%、含み、ややしまりあり。現代のゴミ等も含まれる。

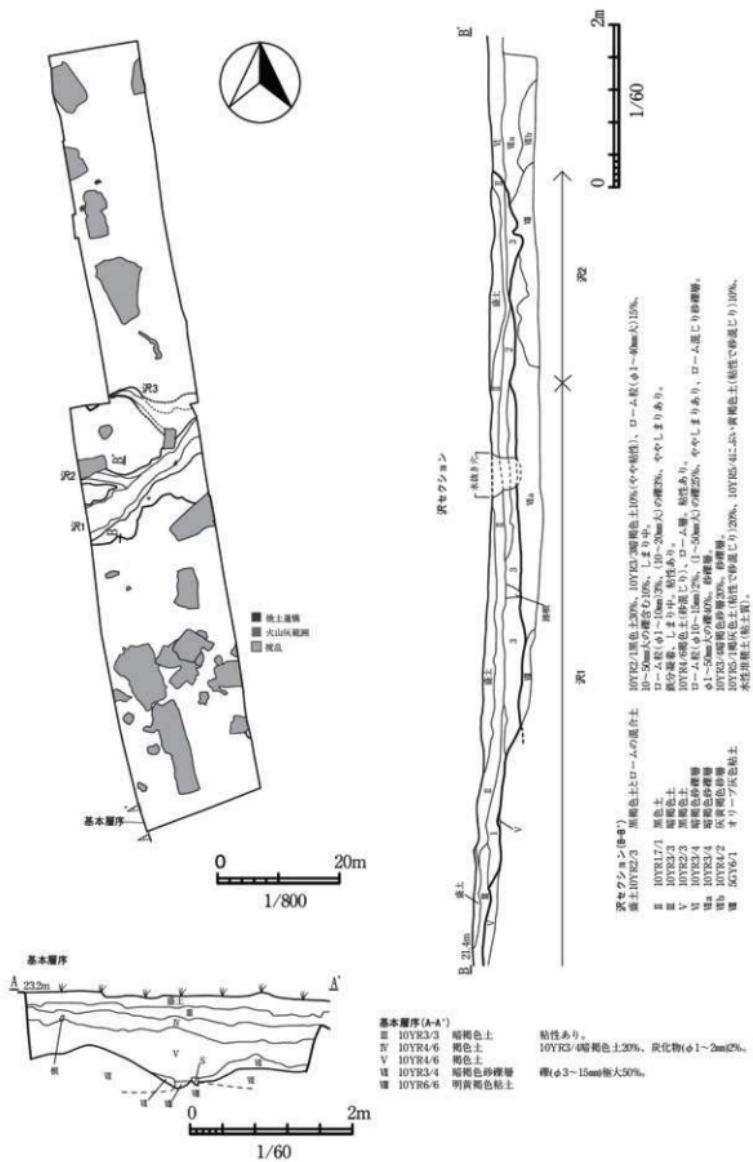


図6 基本層序

第Ⅱ層 10YR2/3 黒色土

調査区の大半で削平・盛土・攪乱が行われていたことから、本層は沢周辺などで部分的に確認することができる。古代から近世の土層と想定しているが、当該期の遺物等は出土しておらず、縄文時代の遺物が少量含まれる。 $\phi 1\sim10mm$ のローム粒3%、 $10\sim20mm$ 大の礫3%含み、ややしまりあり。

第Ⅲ層 10YR3/3 暗褐色土

縄文時代の遺物包含層で、遺物は本層から主体的に出土した。粘性がややあって、鉄分が凝着している状況が確認できる。ややしまりあり。

第Ⅳ層 10YR4/6 褐色土

漸移層であり、本層の上面を縄文時代の遺構確認面とした。沢部分では、開析作用によって本層は下流へ流出しているため欠落する。10YR3/4暗褐色土20%、炭化物（ $\phi 1\sim2mm$ ）2%。

第Ⅴ層 10YR4/6 褐色土

ローム層。10YR4/6褐色土、砂含む。沢部分では、流水や二次堆積の影響等により、粘性のある黒褐色土（10YR2/3）を呈する。

第VI層 10YR3/4 暗褐色砂礫層

沢部周辺部でのみ確認された、ローム粒を混在する砂礫層である。沢の堆積作用によってローム粒を含む砂礫が二次堆積したものと考えられる。 $\phi 10\sim15mm$ のローム粒2%、 $1\sim50mm$ 大の礫25%含み、ややしまりあり。

第VII層 10YR3/4 暗褐色砂礫層

$\phi 3\sim15mm$ の礫50%含む砂礫層。沢部分では、砂と礫の構成の違いによって第VII層aと第VII層bに細分した。これは時期的な相違に起因するものではなく、同時に崖流堆積物が堆積したものを部分的に細分したものと考えている。

第VII層a 10YR3/4 暗褐色砂礫層 矿を主体とする砂礫層。 $\phi 1\sim50mm$ 大の礫40%。

第VII層b 10YR4/2 灰黄褐色砂層 砂を主体とする砂礫層。10YR3/4暗褐色砂層20%含む。

第VIII層 10YR6/6 明黄褐色粘土

水性堆積土で、粘土質。砂や10YR5/1褐灰色土20%、10YR5/4にぶい黄褐色土10%を含む。沢部分では、地下水脈等の影響からか、オリーブ灰色（5GY6/1）を呈する粘土となっている。

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

1 堪穴住居跡

第1号堪穴住居跡 (SI01、図7)

【位置と確認】調査区中央部の沢跡北側、D・E-39グリッドに位置する。本遺構の大半は調査区域外にあるものと思われる。遺構確認中に焼土を検出した（のちに別遺構と判断し「第3号焼土遺構」と命名）ことから周辺を慎重に掘り下げたところ、暗褐色土の落ち込みを確認した。遺構の精査によって、本遺構の付属施設である焼土と、ピット2基を検出したことから堪穴住居跡とした。

【平面形・規模】遺構の大半は調査区域外にあるものと思われ、検出されたのは南東壁170cm、南西壁103cmだけである。平面形は方形をなす可能性があるが、判然としない。

【堆積土】暗褐色土が主体で、自然堆積と思われる。

【床面及び施設】床面はやや起伏があるものの概ね平坦で、焼土1基とピットを2基検出した。Pit2上面で検出された焼土は、36×20cmの楕円形をなしている。Pit1は平面形が35×25cmの不整楕円形で深さ10cm、Pit2は平面形が40×24cmの不整楕円形で深さ14cmを測る。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【遺構の年代】遺物は出土しなかったが、堆積土の様相及び検出層位などから縄文時代のものと考えられる。また堪穴住居跡でなく土坑の可能性も想定できる。

2 土坑

第1号土坑 (SK01、図7・9)

【位置・確認】調査区南側、G-24・25グリッドに位置し、遺構確認面の標高は22.1mである。遺構の大半が調査区域外に延びていることとローム層の掘り込みがほとんどなかったことから、遺構確認時に気づかなかつたものの、遺物の出土と調査区域の壁面における土層観察によって土坑であることを確認したものである。

【平面形・規模・底面】規模は、北西から南東方向は土層観察によって180cmを測り、南西から北東方向は検出された底面で67cmを測ることができる。全体の平面形は不明であるが、北西から南東方向に長軸を有する楕円形とすれば、長軸2.5m、短軸1.5m程度になる可能性がある。土層断面図で確認できた深さは約36cmである。

【堆積土】炭化物・ローム粒等を含む暗褐色土を主体とし、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

【出土遺物】覆土から自然疊5点とともに縄文土器1,236gが出土し、そのうち縄文土器5点を図示した（図9-1～5）。1は全体の3分の1程度が遺存する縄文土器で、底面から約17cm浮いた状態で出土した。平口縁の深鉢形で口頭部が内反し、口唇部断面が丸みを呈する。胴部下半部を欠損している。文様施文は地文縄文後に胴部中に波頭文様を施文し、J字文様の連続文様を施文している。2は鉢形で底辺部寄りに渦巻き文様を施文、5は波状口縁の頂部に粘土紐を貼り付けている。時期は1～4が縄文時代中期の大木10式併行期、5は縄文時代中期の円筒上層e式に相当する。

【遺構の年代】出土遺物から縄文時代中期後半、大木10式期の土坑と思われる。

3 焼土遺構

第1号焼土遺構 (SN01、図7・9)

【位置と確認】G-48グリッドに位置し、標高は22.7mである。第Ⅲ層にて確認し、本焼土遺構の約5m南西側には第2号焼土遺構が検出された。

【平面形と規模】規模は長軸109cm、短軸64cmで、東西に長い不整形を呈し、焼土の厚さは7cmである。

【堆積土】焼土の主体は明赤褐色焼土で、下層は明赤褐色土を含む黒褐色土である。

【出土遺物】遺物は火床面及び周辺から繩文土器片が出土し、そのうち図9-6～9の4点を図示した。6はあげ底の鉢形、7～9は深鉢形の胴部破片で縦位方向に条痕文を施し焼成は良好である。破片はすべて同一個体の可能性が高い。時期は繩文時代後期後葉～末葉と思われる。

【遺構の年代】検出された層位と出土遺物から、繩文時代後期後葉～末葉の遺構である可能性がある。

第2号焼土遺構 (SN02、図7)

【位置と確認】F-47グリッドに位置し、標高は22.6mである。第Ⅲ層にて確認し、本焼土遺構の約5m北東側には第1号焼土遺構が検出された。

【平面形と規模】規模は長軸124cm、短軸80cmで、北東から南西方向に長い不整形を呈する。焼土の厚さは約8cmである。

【堆積土】焼土の主体は明赤褐色焼土で、下層は焼土粒を含む黒褐色土である。確認面及び土層断面では白頭山苔小牧火山灰と思われる火山灰や暗褐色土が検出されたが、風倒木などの後世の擾乱によって焼土遺構の一部に混入・擾乱されたものと思われる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【遺構の年代】検出された層位と第1号焼土遺構の状況から、繩文時代後期後葉～末葉の遺構である可能性がある。

第3号焼土遺構 (SN03、図7)

【位置と確認】D・E-39グリッドに位置し、標高は22.5mである。第1号堅穴住居跡の堆積土精査中に確認した。当初堅穴住居跡に伴うものと思われたが、土層を精査した結果、堅穴住居跡とは異なる時期に構築された別遺構であると判断されたため、整理段階で第3号焼土遺構と命名した。

【平面形と規模】平面形の規模・形状は不明であるが、断面図上では長さ43cm、厚さ5cmを測る。

【堆積土】焼土の主体はにぶい赤褐色焼土である。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【遺構の年代】本遺構は沢跡3の上流地点に位置しており、沢跡3へ流れ込んだと考えられる間層とⅡ層の間で検出された。このことから、繩文時代後半期から中世以前のいずれかの時期の所産と推察することができる。第1号焼土遺構が繩文時代後期後葉～末葉の遺構と思われることから、本遺構も当該時期に帰属する可能性が高い。

4 沢跡

調査区中央部で、南西から北東へ流れていく沢跡が3条（図8）検出された。

調査着手前には調査区全域が平坦地であったものの、表土及び擾乱土を除去していくところ湿性

の高い黒色土の落ち込みが確認された。適宜土層観察用のベルトを設定し掘り下げていったところ南西側で2条に分岐していることが分かり、北東部でもう1条分岐することが判明した。そこで沢跡は南西から北東へ沢1、沢2、沢3と命名した。沢1が本流で、沢2・沢3より格段に湧水量が多い。それぞれの沢について記載していくこととする。

沢1（図8）

【規模】 調査区内で確認された規模は長さ約23.8m、幅約5.8~11mで、南西から北東方向へやや湾曲するも比較的直線的に流れている。底面標高は南西端で21.4m、北東端で20.9mを測り、調査区内での比高差は約50cmである。

【堆積土】 確認面ではⅡ層が、覆土上位は黒褐色土が、覆土下位は黄灰色砂礫層が堆積していた。2カ所で白頭山苔小牧火山灰が検出されたが、面ではなく限定的であることから、風倒木等に入り込んで二次堆積したもの可能性が高い。

【出土遺物】 G・H-35・36グリッド周辺及びE-35グリッド周辺で縄文土器片が比較的まとまって出土した。このグリッド周辺で沢路幅が広くなっていることから、上流から流されてきた遺物が、そこの水流変化によって岸辺に打ち上げられたものと思われる。これらの遺物は遺構外出土遺物として扱っており、縄文時代後期の遺物が主体となっている。

沢2（図8）

【規模】 調査区内で確認された規模は長さ約6.8m、幅約2.0~2.6mで、西から東方向へやや湾曲しながら流れ、東端は沢1に合流している。底面標高は西端で21.3m、東端で21.2mを測り、調査区内での比高差は約8cmである。

【堆積土】 確認面ではⅡ層が、覆土上位は黒褐色土が、覆土下位は黄灰色砂礫層が堆積していた。

【出土遺物】 縄文土器片が覆土から少量出土したが、遺構外出土遺物として扱っている。

沢3（図8）

【規模】 調査区内で確認された規模は、長さ約5.3m、幅約0.6~2.0mであった。北西から南東方向へやや蛇行しながら流れていき、本来は南東部で沢1に合流する、長さ14m程度の沢であったものと思われる。底面標高は、西端で21.5m、南東端で21.0mを測り、調査区内での比高差は約50cmである。

【堆積土】 掘りあげてしまったため土層断面図を作成していないが、黒色土～暗褐色土が堆積していた。湧水があり、常に湿り気を帯びている。本沢の上流部にあたる第1号竪穴住居跡付近では、にぶい黄褐色土（図7の第1号竪穴住居跡セクション図参照）が検出されたが、これは本沢の運搬堆積作用によって堆積したⅢ層由来の間層と考えられ、今回の調査ではここでのみ確認された間層である。

【出土遺物】 本沢からは、遺物は出土しなかった。

以上、これらは人為的に作られた溝跡などの遺構ではなく、自然の開析作用による、3条が合流する一的な沢跡と思われる。沢1・2の堆積土には二次堆積（流入）したと思われるⅢ層土、確認面付近にはⅡ層が検出されたことなどから、縄文時代には沢として開口し流水があったものと考えられる。そして埋没した時期は、Ⅱ層が検出されていることから古代以降に埋没したものと思われる。ただし、沢3は上流部で検出された間層の存在から、縄文時代後期には埋没していたものと考えられる。また沢跡内及び周辺では、施設の構築や土留めなど土木工事等の痕跡は確認できなかった。

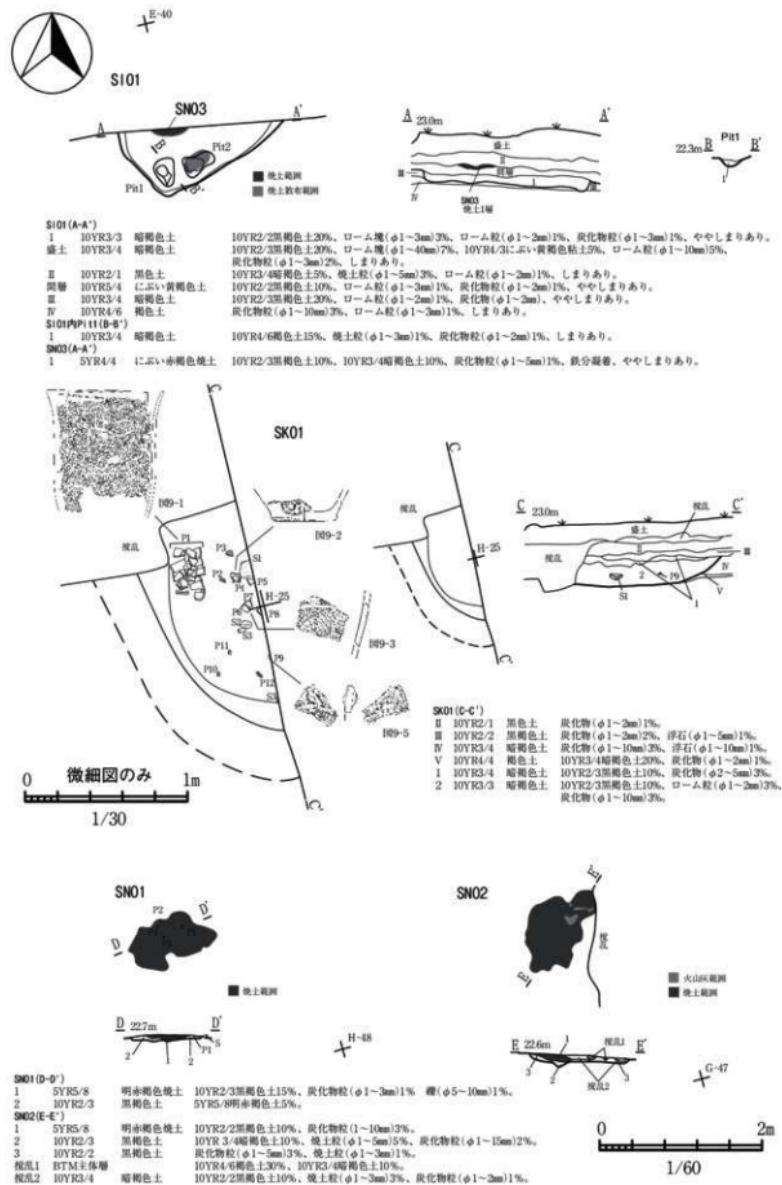


図7 積穴住居跡・土坑・焼土遺構

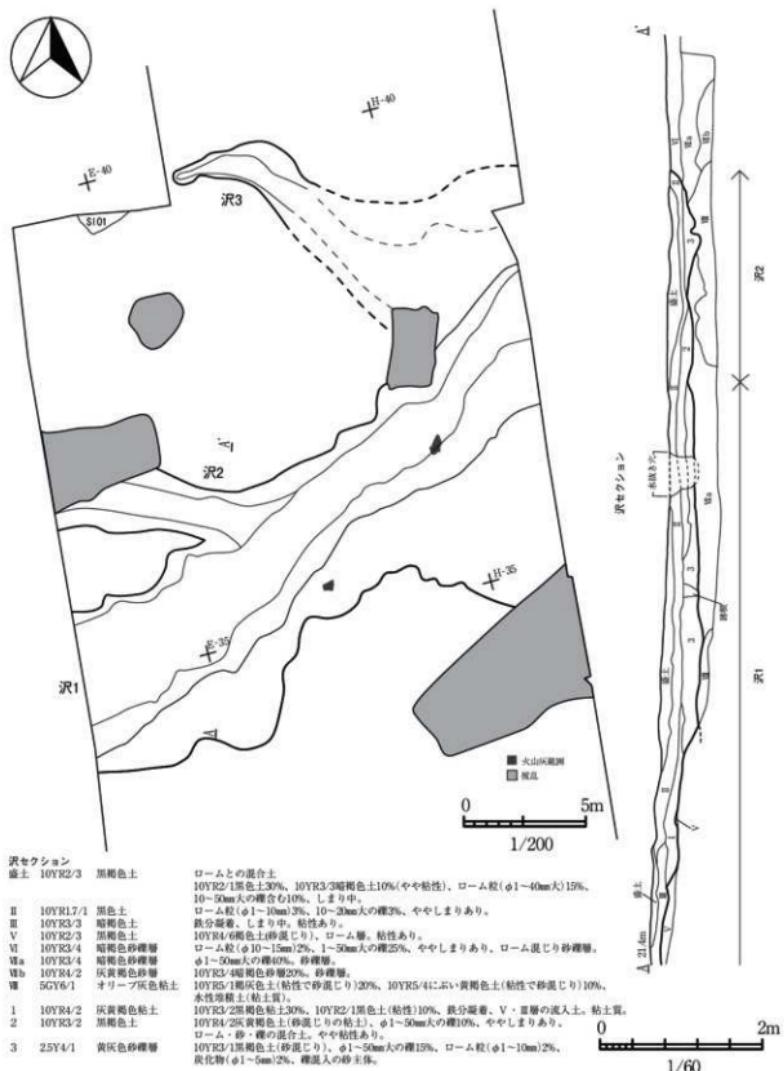


図8 沢跡

第2節 遺構外の出土遺物

1 土器 (図9-10~17・図10)

土器は調査区全体に散在して出土しており、明瞭な遺物包含層は確認できなかった。縄文時代中期の土器はC・D-23グリッドを中心に、縄文時代後期の土器はG-35・36グリッドを中心に出土しており、時期毎にまとまりのある出土状態を呈している。縄文時代中期及び後期に大別して記載する。

縄文時代中期は深鉢形で、頂端部が銳利な波状口縁と平口縁が確認される。波状口縁の突起部に粘土紐を貼り付け下位に沈線を施文(18・19)、平口縁の口唇部寄りに横位の沈線(20)、口唇部寄りに一条の沈線(24)施文している。(26)は頂端部の垂下部に渦巻き文様を施文しており櫻林式期の可能性も考えられるが、中期の多くの土器は円筒上層e式に相当すると思われる。

縄文時代後期は、深鉢形・壺形・浅鉢形の器種が確認される。深鉢形は、平口縁で口頭部は内反し胴部が若干張り出す形状である。底面は平底とあげ底を呈する。口唇部の整形は丸みをもつ断面であり、(12)は指頭圧痕による連続刻みが確認される形状である。文様施文は、櫛歯状工具を用いた斜位文(10)・蛇行文(11)や交差状文様(30) 渦巻文(33)の沈線文様を施文している。粗製土器は縄文のみ施文(17)と、波状口縁で焼成が良好な無文土器(41)がみられる。壺形は、平口縁で口頭部が強く内反する形状である。口頭部に横位と弧状文(37・38)、胴部に山形文(42)を施文している。浅鉢形は、薄手のつくりで今回の調査では出土例が少ない。文様は楕円形文(39)を組み合わせて連続して施文している。

縄文時代後期の土器の施文の特徴は、文様要素及び文様パターンが少ない土器である。時期は(28)・(29)が施文方法の特徴から十腰内I式以前の可能性が考えられるものの、櫛歯状文様の多様・狭義の文様区画帯の構成から判断して、多くの土器は十腰内I式の後半で十腰内Ib式という限られた狭い時期に相当すると思われる。

2 土製品 (図10-49)

土製品は土器片円板が1点出土した。深鉢形の胴部破片を用いており欠損品である。打ち欠き後に断面部を一部磨っている。時期は縄文時代後期の十腰内I式である。

3 石器 (図11~14)

石器は縄文土器の出土状況と同様、剥片石器・礫石器ともに沢より南側の地区から出土しており、トレンチ周辺と沢1右岸部分に比較的まとまる傾向にある。器種は石鎌・石槍・石匙・削器・搔器・使用痕剥片・石錘・敲磨器及び凹石類があり、石器ではないが赤鉄鉱片も出土した。

石鎌は有茎(1・2)・無茎(3)ともにあり、石槍(4・5)はいずれも欠損品、石匙(6~8)はいずれも縦型のものである。削器は縱長剥片の長辺に刃部を作出するものが多く(9・10)、搔器と思われるもの(13~15)は、自然面が残る剥片を使用している。使用痕剥片(16)は円弧状の剥片末端に微細剥離が見られる。(17)は使用の痕跡は認められないが、赤鉄鉱の破片であることから図示した。石錘(18)は凝灰岩の自然縞を使用し、両端を打ち欠いて錘に加工している。(14・19~27)は敲磨器及び凹石類である。(19・20)は、流紋岩の扁平疊縛部を打ち欠いて握りやすいように加工し、側面を磨り面として使用したものである。(19)は使用後に欠損したが、(20)は使用されることなく廃棄されたようである。厚みのある円縞を素材としているものは凝灰岩が多く、敲き(14・22・23・24)、敲き・磨り(21)、敲き・凹み(25)、敲き・凹み・磨り(26・27)がある。(14・23)は珪質頁岩製である。

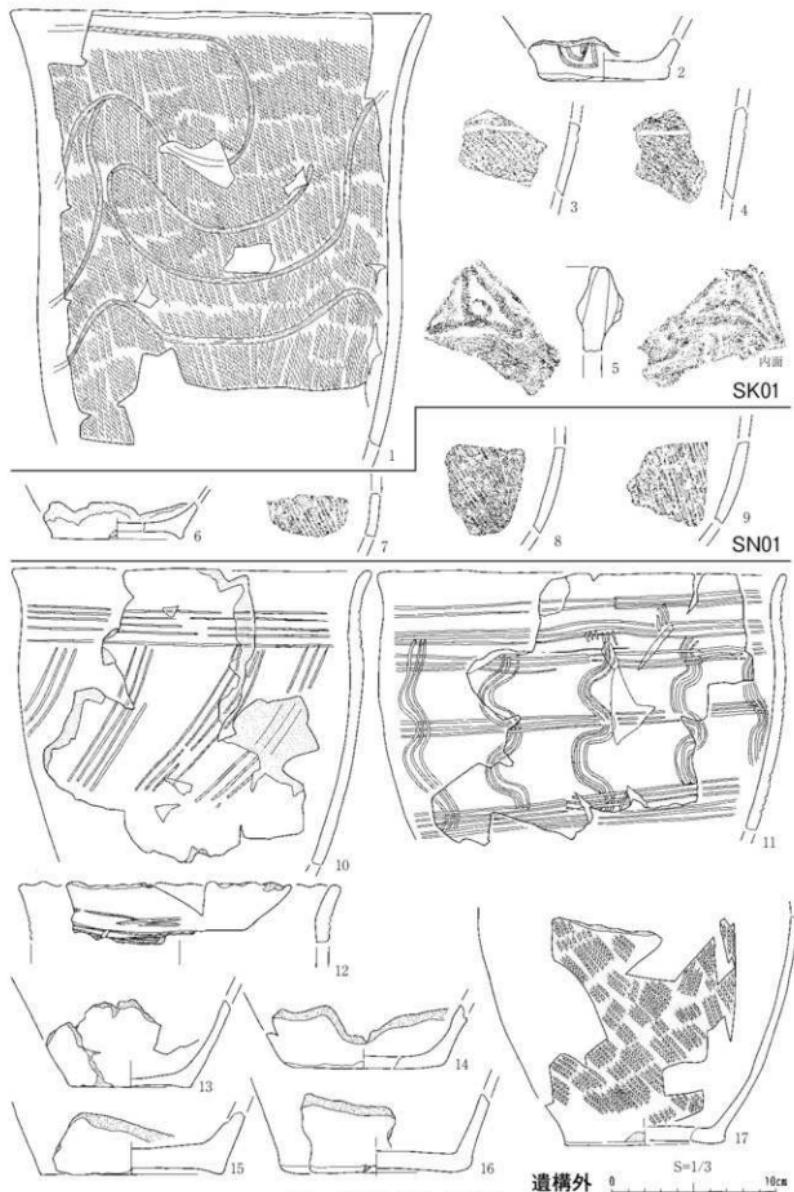


図9 遺構内外出土土器(1)

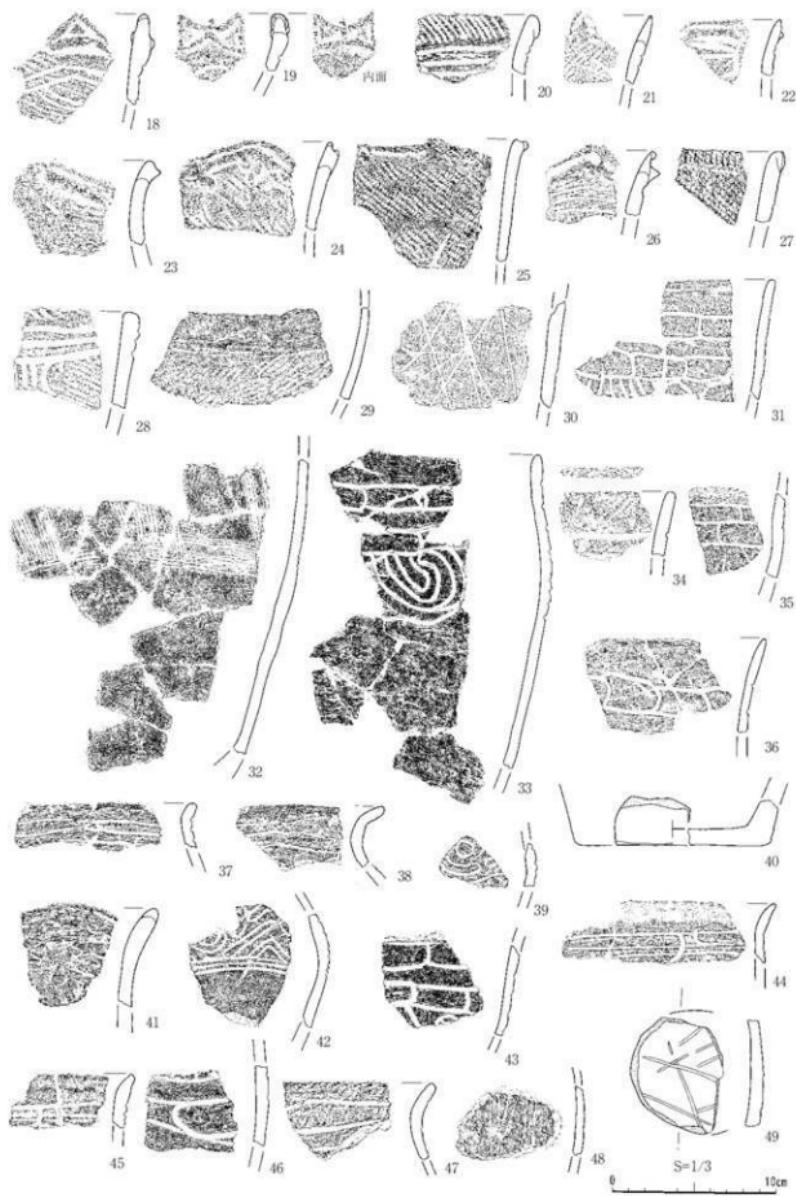


図10 遺構内外出土土器(2)

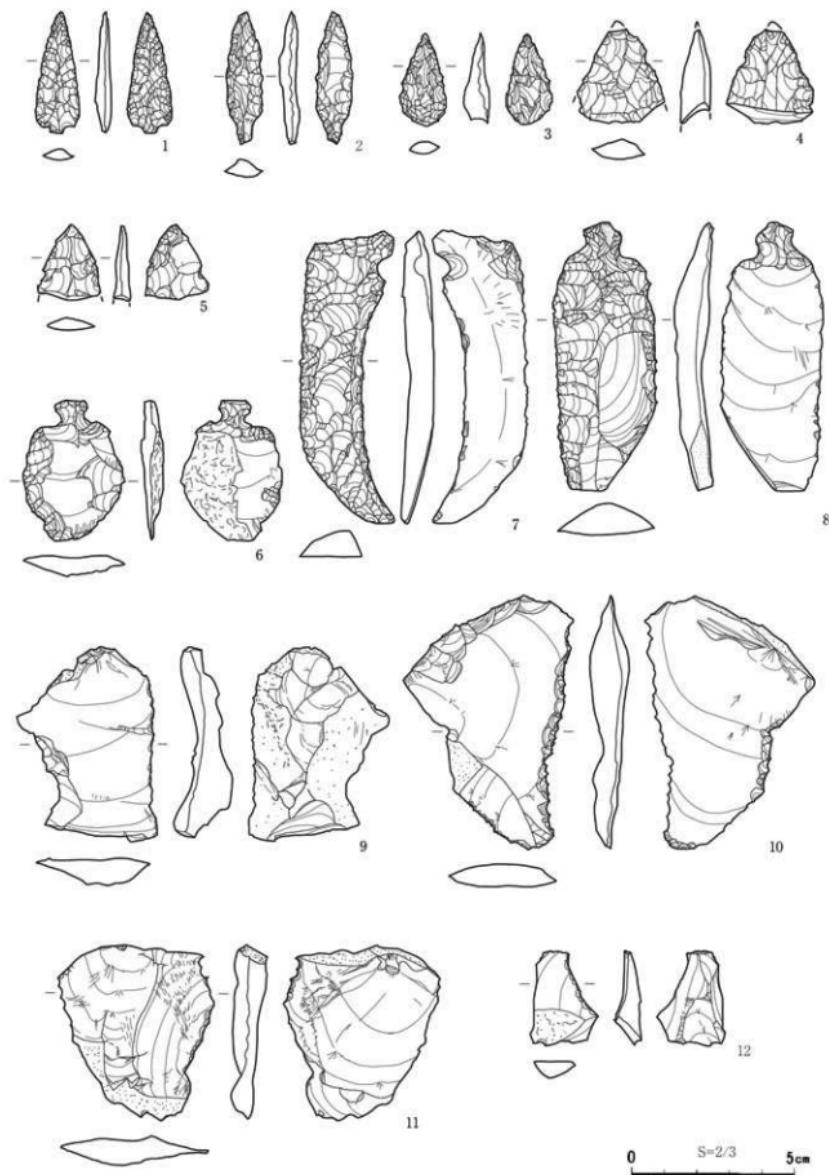


図11 遺構外出土石器(1)

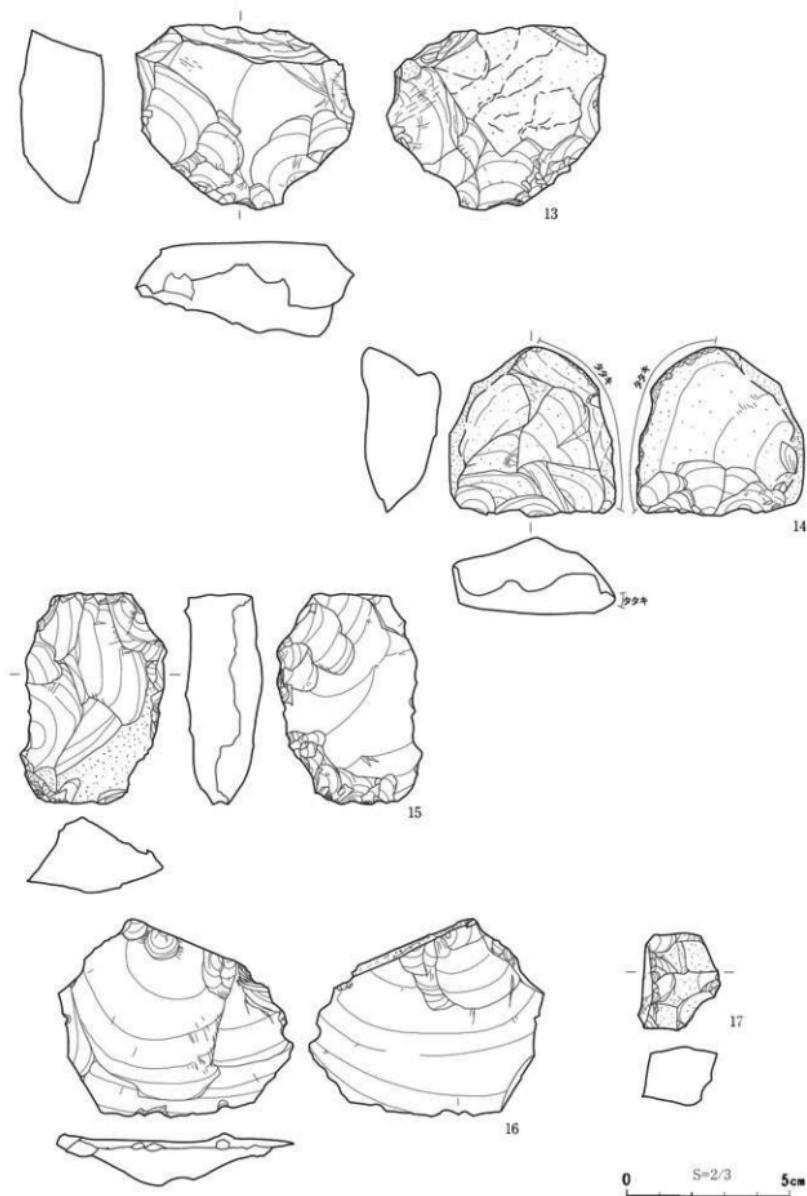


図12 遺構外出土石器(2)

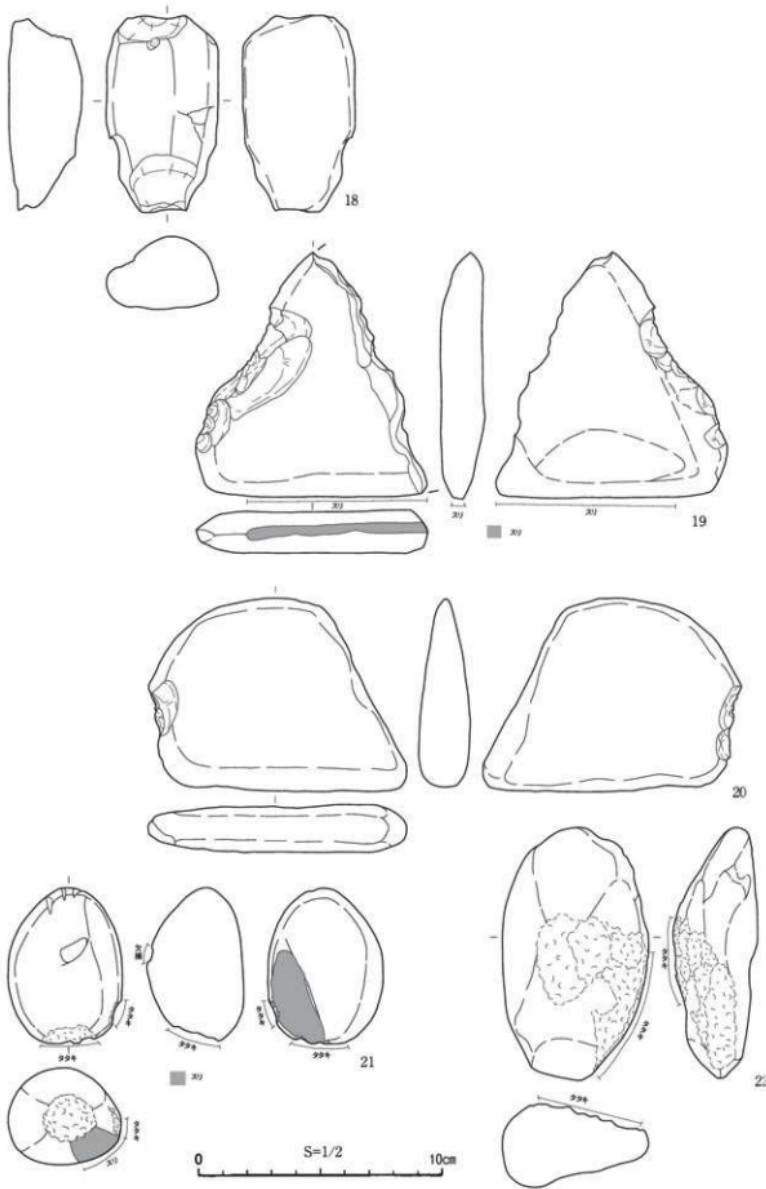


図13 遺構出土石器(3)

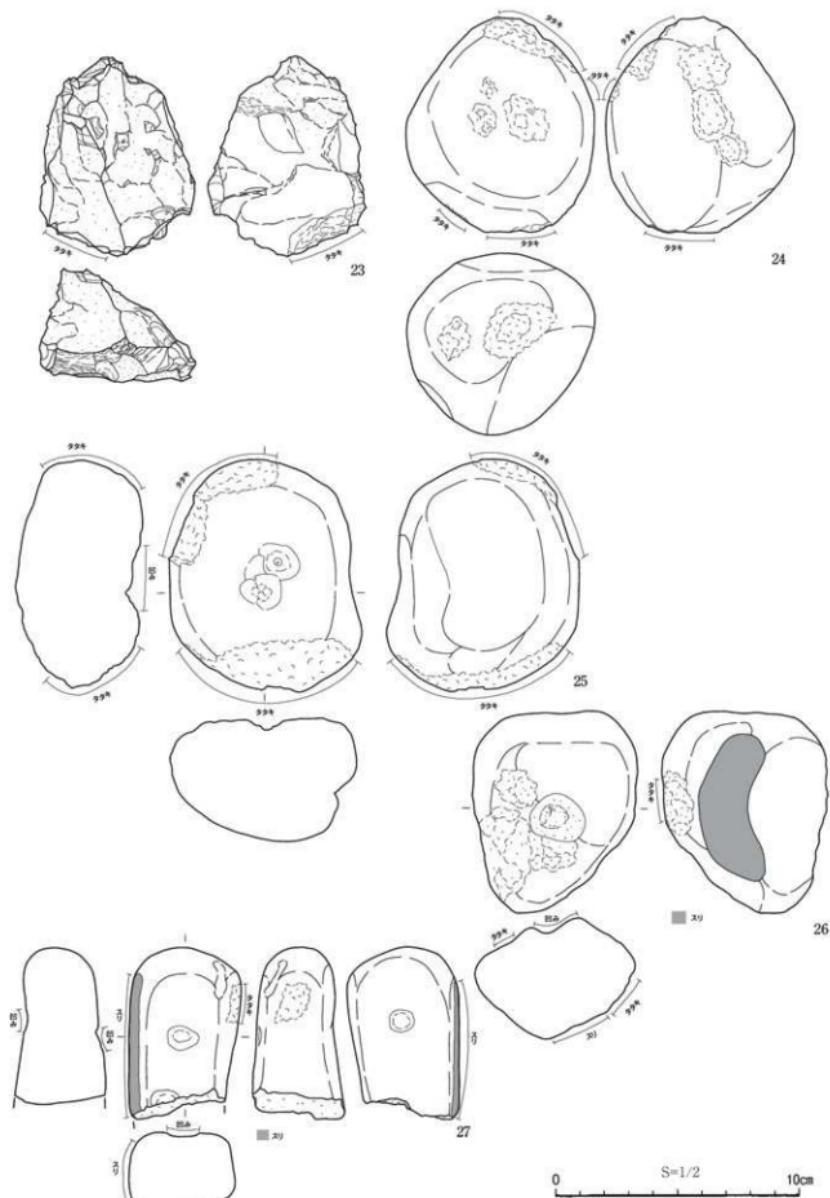


図14 遺構外出土石器(4)

第3節 遺物観察表

表4 土器観察表

図	番号	出土位置・層位	器種	外 面 施 文	内面調整	備 考
9	1	SK01 フク土	深鉢	平口縁 地文縦文(LR) J字状文の連続文様	ヨコヒタテナ	スス状炭化物付着
9	2	SK01 フク土	鉢	平底 方形文様		
9	3	SK01 フク土	深鉢	地文縦文(既) 横位沈線	ヨコナデ	
9	4	SK01 フク土	深鉢	地文縦文(既) 横位沈線	タテナデ	
9	5	SK01 フク土	深鉢	波状口縁 口唇部寄りに粘土縫 縫位沈線	ヨコナデ	裏面に粘土縫
9	6	SN01 フク土	鉢	あげ底 無文		7~9は同一個体の可能性
9	7	SN01 フク土	深鉢	縫の条痕文	ヨコナデ	6・8・9は同一個体の可能性
9	8	SN01 フク土	深鉢	縫の条痕文	ヨコナデ	6・7・9は同一個体の可能性
9	9	SN01 フク土	深鉢	縫の条痕文	ヨコナデ	6~8は同一個体の可能性
9	10	G-36	深鉢	平口縁 横位・斜位(柳歛状文)	ヨコナデ	スス状炭化物付着
9	11	G・H-35・36	深鉢	平口縁 横位・蛇行文(柳歛状文)	ヨコナデ	スス状炭化物付着
9	12	D22 Ⅲ層	深鉢	平口縁 口唇部上面に指頭圧痕 横位沈線	ヨコナデ	スス状炭化物付着
9	13	B+レンチ Ⅲ層	深鉢	あげ底 無文	ヨコナデ	スス状炭化物付着
9	14	B-36 Ⅲ層	深鉢	平底 無文	ヨコナデ	スス状炭化物付着
9	15	B-36 Ⅲ層	深鉢	あげ底 無文	ヨコナデ	スス状炭化物付着
9	16	B-35 Ⅲ層	深鉢	あげ底 無文	ヨコナデ	スス状炭化物付着
9	17	C-23 Ⅲ層	深鉢	あげ底 縫文(既)	タテナデ	
10	18	D-23 Ⅲ層	深鉢	波状口縁 横位・弧状文(沈線)	ヨコナデ	裏面に粘土縫
10	19	D-23 Ⅲ層	深鉢	二叉状突起 粘土縫・横位沈線	ヨコナデ	裏面に粘土縫
10	20	D-24 Ⅲ層	深鉢	平口縁 口唇部寄りに撫糸痕痕 横位沈線	ヨコナデ	
10	21	B-29 Ⅲ層	深鉢	波状口縁 粘土縫・縫位の沈線	ヨコナデ	
10	22	D-24 Ⅲ層	深鉢	平口縁 横位・縫位の沈線	ヨコナデ	
10	23	B-24 Ⅲ層	深鉢	波状口縁 縫位の沈線	ヨコナデ	
10	24	G-22 Ⅲ層	深鉢	波状口縁 横位の沈線 粘土縫 縫文(RL)	ヨコナデ	
10	25	G-24 Ⅲ層	深鉢	波状口縁 縫文(既)	ヨコナデ	スス状炭化物付着
10	26	G-24 Ⅲ層	深鉢	波状口縁 縫位の沈線	ヨコナデ	
10	27	C-24 Ⅲ層	深鉢	折り返し口縁 縫文(既RL)	ヨコナデ	
10	28	D-23 Ⅲ層	深鉢	平口縁 横位・縫位の沈線 縫文(RL)	ヨコナデ	スス状炭化物付着
10	29	H-36 Ⅲ層	壺	横位文様 丸てん縫文(RL)	ハラナデ	スス状炭化物付着
10	30	G-36 Ⅲ層	深鉢	交差状沈線	ヨコナデ	スス状炭化物付着
10	31	G-35 Ⅲ層	深鉢	平口縁 横位・弧状文(沈線)	ヨコナデ	
10	32	G-36 Ⅲ層	深鉢	横位・縫位(柳歛状文)	ヨコナデ	スス状炭化物付着
10	33	G-35 Ⅲ層	深鉢	横位・渦巻文(沈線)	ヨコナデ	
10	34	トレチ Ⅱ層	深鉢	平口縁 縫位の沈線 縫文(RL)	ヨコナデ	
10	35	H-37 Ⅱ層	浅鉢	横位・弧状文(沈線)	ヨコナデ	
10	36	G-35 Ⅲ層	深鉢	平口縁 横位・弧状文の沈線	ヨコナデ	
10	37	トレチ Ⅱ層	壺	平口縁 横位の沈線	ヨコナデ	
10	38	G-35 Ⅱ層	壺	平口縁 横位の沈線	ヨコナデ	
10	39	C-23 Ⅲ層	浅鉢	円形・稍円形文の沈線	ヨコナデ	
10	40	E-35 Ⅱ層	深鉢	平底 無文	ヨコナデ	
10	41	トレチ Ⅱ層	深鉢	波状口縁 無文	ヨコナデ	
10	42	C-24 Ⅲ層	壺	横位の沈線 山形文	ヨコナデ	
10	43	H-36 Ⅲ層	深鉢	横位・弧状文の沈線	ヨコナデ	スス状炭化物付着
10	44	B-35 Ⅲ層	深鉢	横位・弧状文の沈線	ヨコナデ	
10	45	G-35 Ⅲ層	深鉢	横位・縫位の沈線	ヨコナデ	
10	46	D-22 Ⅲ層	深鉢	横位・弧状文の沈線	ヨコナデ	スス状炭化物付着
10	47	B-24 Ⅲ層	壺	平口縁 地文縦文(RL)・横位沈線	ハラナデ	
10	48	H-36 Ⅲ層	深鉢	交差状の沈線	ヨコナデ	

表5 土製品観察表

図	番号	出土位置・層位	器種	外 面 施 文	内面調整	備 考
10	49	B-36 Ⅲ層	土器形鉢	交差状の沈線	ヨコナデ	深鉢形の胸部

表6 石器観察表

図 番号	出土地点	層位	種類	器種	石質	計測値				整理番号
						長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
11 1	トレンチ3	II層	剥片石器	石鎚	珪質頁岩	37.0	13.5	5.0	1.9	030
11 2	トレンチ3	II層	剥片石器	石鎚	珪質頁岩	41.0	11.5	6.0	2.4	031
11 3	トレンチ3	II層	剥片石器	石鎚	珪質頁岩	28.0	14.0	7.5	2.3	032
11 4	トレンチ3	II層	剥片石器	石槍	珪質頁岩	29.0	26.5	9.0	5.8	022
11 5	遺構外トレンチ	III層	剥片石器	石槍	珪質頁岩	23.0	19.0	5.0	1.9	024
11 6	北区	I層	剥片石器	石匙	珪質頁岩	43.0	31.0	7.0	7.1	裏面火バキによる剥落
11 7	D-30	III層	剥片石器	石匙	珪質頁岩	29.0	21.0	8.0	20.5	026
11 8	C-26	III層	剥片石器	石匙	珪質頁岩	83.0	32.0	12.5	26.0	027
11 9	C-23	III層	剥片石器	削器	珪質頁岩	60.0	43.0	18.0	27.3	013
11 10	遺構外	表土	剥片石器	削器	珪質頁岩	78.0	52.0	12.0	34.6	019
11 11	遺構外トレンチ	III層	剥片石器	削器	珪質頁岩	54.0	48.0	11.0	21.8	020
11 12	遺構外トレンチ	III層	剥片石器	削器	珪質頁岩	90.0	29.0	10.0	3.5	025
12 13	G-25	III層	剥片石器	孫器?	珪質頁岩	57.0	67.0	29.0	121.7	011
12 14	H-36	III層	剥片石器	孫器?・敲石	珪質頁岩	52.0	51.0	24.0	75.7	舞面に敲打あり
12 15	トレンチ1	II層	剥片石器	孫器?	珪質頁岩	65.0	45.0	29.0	73.0	015
12 16	北区	I層	剥片石器	使用痕剥片	珪質頁岩	61.0	72.0	16.0	42.9	021
12 17	トレンチ10	II層	剥片石器	剥片?	赤鉄鉱	30.0	25.0	18.0	16.7	016
13 18	遺構外トレンチ2	III層	礫石器	石鍤	凝灰岩	81.0	46.0	30.0	132.2	004
13 19	北区	I層	礫石器	磨石	流紋岩	101.0	95.0	18.0	201.7	欠損
13 20	E-35	III層	礫石器	磨石	流紋岩	80.0	106.0	21.0	191.4	未製品(未使用)
13 21	C-25	II層	礫石器	敲磨石	珪質凝灰岩	64.0	47.0	39.0	129.1	欠損
13 22	D-23	II層	礫石器	敲石	珪質凝灰岩	104.0	60.0	35.0	187.9	002
14 23	遺構外	表土	礫石器	敲石	珪質頁岩	82.0	64.0	47.0	173.5	010
14 24	G-23	III層	礫石器	敲石	凝灰岩	89.0	77.0	75.0	292.3	003
14 25	G-36	IV層	礫石器	敲・凹石	凝灰岩	96.0	79.0	52.0	458.7	007
14 26	B-24	III層	礫石器	敲・凹・磨石	凝灰岩	83.0	68.0	50.0	228.3	009
14 27	D-24	II層	礫石器	砂岩	砂岩	71.0	46.0	38.0	161.3	欠損

まとめ

後湯(1)遺跡は、青森市の中心部から北西方向へ直線距離で約16kmの地点に位置する。津軽山地の末端丘陵に隣接する低地で、陸奥湾へ流れ込む後湯川によってもたらされた泥流地形上に立地する。東方の陸奥湾海岸汀線までは約2.4km、調査地点の標高は概ね約23mである。

調査の結果、検出された遺構は堅穴住居1軒、土坑1基、焼土遺構3基で、埋没した沢跡も3条検出された。出土遺物は縄文時代の土器・石器類が段ボール箱6箱分出土し、本遺跡は縄文時代中期及び後期の遺跡であることが確認された。各遺構の帰属時期は以下のように考えられる。

縄文時代中末期葉(大木10式期)

第1号土坑

タ 中期～後期?

第1号堅穴住居跡

タ 後期後葉～末葉

第1・2・3号焼土遺構

沢跡跡～縄文時代には開口し、沢3は縄文後期以降、沢1・2は古代以降に埋没した可能性がある。

遺物の分布状況は、C・D-23グリッドを中心とする縄文時代中期の区域と、G-35・36グリッドを中心とする縄文時代後期の区域とが想定できる。縄文土器は中期の円筒上層e式土器、榎林式土器、大木10式併行土器、後期の十腰内Ib式土器がみられる。土製品は土器片円板が1点、石器は石鎚・石槍・石匙・削器・搔器・使用痕剥片・石鍤・敲磨器及び凹石類があって、赤鉄鉱片も出土した。

遺跡の主体部は、概ね26グリッドラインより南側にあるものと思われ、沢の右岸からは縄文時代後期の遺物が滞留したように出土した。市道四戸橋1号線がかすかに尾根状をなす微高地を通ないことから、今回の調査区の南西方向、市道に沿うように遺跡主体部が存在する可能性が考えられる。

新幹線建設事業に伴う後湯(1)遺跡の発掘調査は、今回の本線部分の調査に加え、平成22年度にも引き続き調査を行って多数の遺構・遺物が検出された。また、本遺跡の約300m南側に位置する四戸橋富田遺跡でも縄文時代後期前葉の遺構・遺物が多数見つかっており、これらの調査成果も踏まえてこの地域の様相を総合的に検討する必要がある。



後鴟(1)遺跡 写真図版

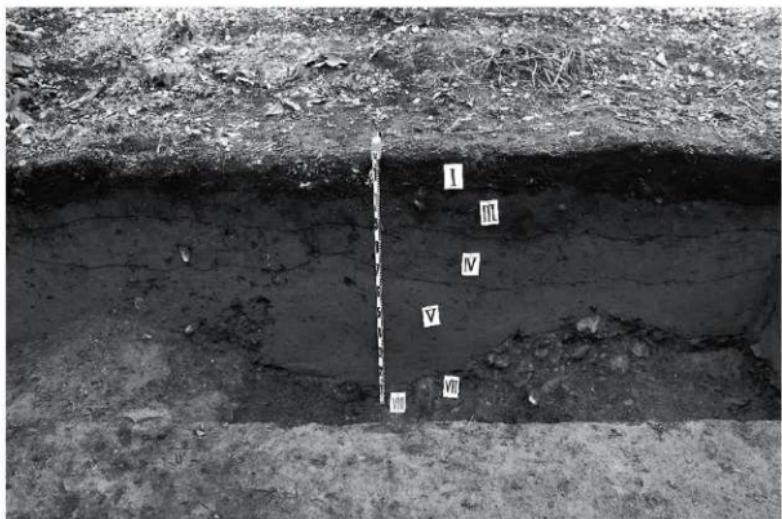


遺跡遠景 NE→



調査区全景 SW→

写真1 遺跡遠景・全景

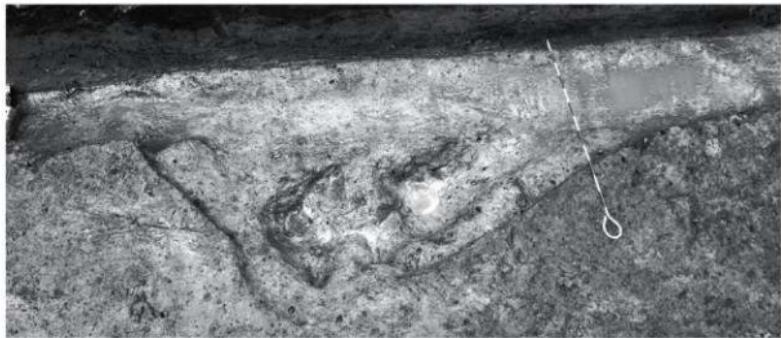


基本層序 NE→



沢 七クション NE→

写真2 基本層序



第1号竪穴住居跡 完掘 S→



第1号竪穴住居跡・第3号焼土遺構 セクション S→



第1号竪穴住居跡 焼土検出状況 S→

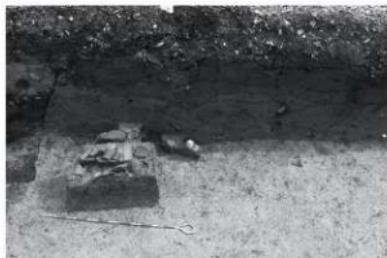
写真3 竪穴住居跡・第3号焼土遺構



第1号土坑 完掘 W→



第1号土坑 セクション W→

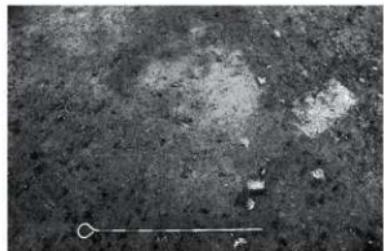


第1号土坑 遺物出土状況 W→



第1号土坑 遺物出土状況アップ W→

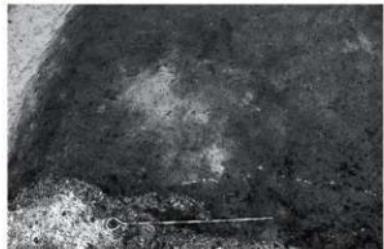
写真4 土坑



第1号焼土遺構 検出 E→



第1号焼土遺構 セクション S→



第2号焼土遺構 検出 E→



第2号焼土遺構 セクション E→



北区発掘 N E→

写真5 第1・2号焼土遺構・北区



沢跡 全景 SW→



沢1セクション SE→

写真6 沢跡(1)



沢1 遺物出土状況 E→



沢1 遺物出土状況 N→



沢1 遺物出土状況 E→



沢跡 調査風景 E→

写真7 沢跡(2)



調査区南半完掘 N E→



北区調査風景 S →



沢跡調査風景 N E→

写真8 調査風景

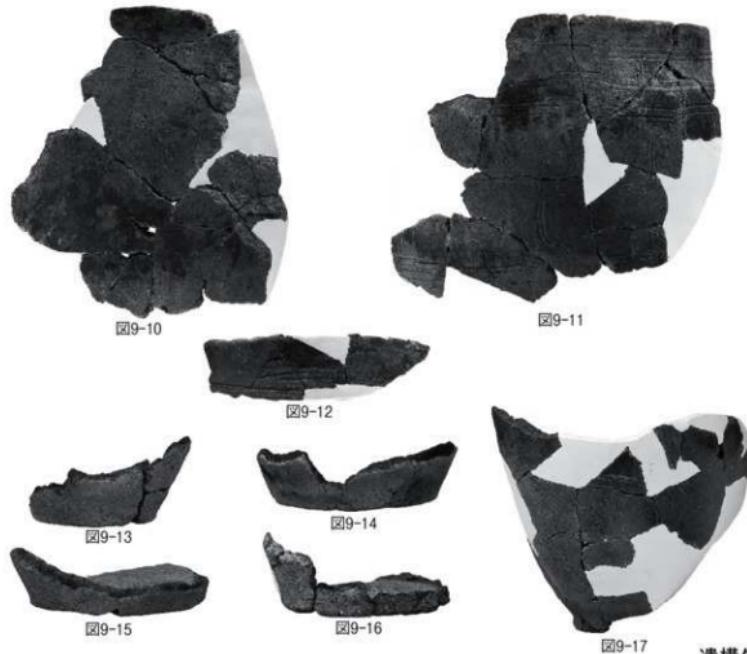


写真9 出土遺物(1)



遺構外 (S=1/3)

写真10 出土遺物(2)

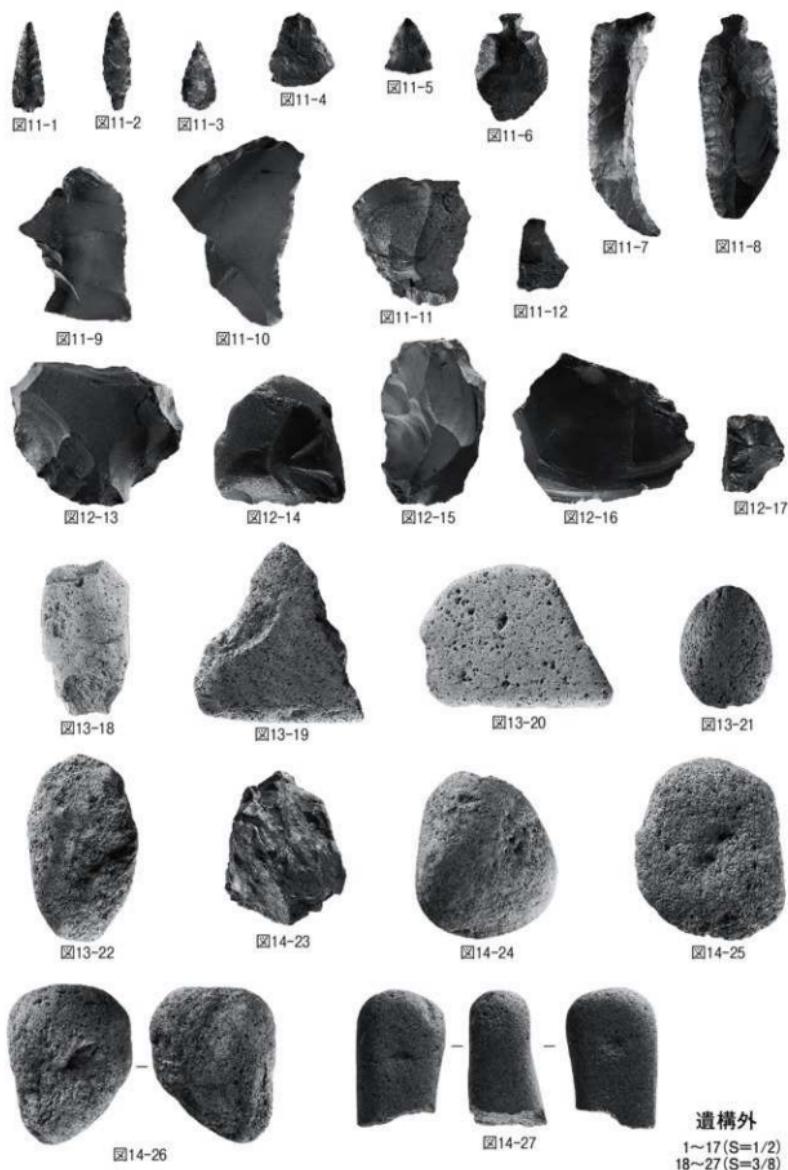


写真11 出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	うしろがたかっこいちいせき						
書名	後潟(1)遺跡						
副書名	北海道新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第501集						
編著者名	神 康夫・成田滋彦						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	西暦2011年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	世 界 潛 地 系 (日本潜地系)	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
	市町村	遺跡番号	北緯 東経				
後潟(1)遺跡	青森県青森市大字西戸 橋字磯部243-570、外	02201	201031 40° 56' 35° (25)	140° 37° (38) 58° (11)	20090804 ～ 20091023	2,260	北海道新幹線建設事業に伴う事前調査
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
後潟(1)遺跡	散布地	縄文時代	堅穴住居跡 1軒 土坑 1基 焼土遺構 3基 (沢跡3条)	縄文土器・石器 土器片円板 段ボール箱6箱			
要約	平成21年度の後潟(1)遺跡の発掘調査では、北海道新幹線建設予定地のうち本線部分を調査対象区とした。検出されたのは縄文時代中期後半（円筒上層e式、榎林式、大木10式併行）、後期（十腰内Ib式、後業～末葉）の遺構・遺物であった。						

青森県埋蔵文化財調査報告書 第501集

後潟(1)遺跡

—北海道新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2011年(平成23年)3月30日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 所 有限会社 アート印刷
〒037-0011 五所川原市金山字龟ヶ岡46-7
TEL 0173-34-4487 FAX 0173-34-4459
